

○朝倉委員 わかりました。ありがとうございます。

○秋元市長 ありがとうございます。他にはよろしいでしょうか。

○道尻委員 道尻と申します。本日はありがとうございました。それぞれお話いただいた中で、名達さんのご報告では、起業を目指して他校の学生や大人と関わる中で探究的な学びを実践されたことで、谷さんのご報告では、大人との活動で双方向の学びを経験されていることで、お二人とも今の仕事や生活に役立っているということが非常に印象的でした。

私の高校生活は40年以上前になりますけれども、随分と自分が高校生のときとは違うことをやっていらっしゃるなと思いました。楽しそうだな、また高校生に戻りたいなという気もするところですが、一つだけお二人に質問したいと思います。

小学校から社会人になるまでの学校生活の中で、本日は高校段階における社会と繋がる教育、または社会に開かれた教育ということについて、ご自身の体験をお話いただきましたが、今振り返ってみて、高校生活の中でそういった体験をすることにどういう意味があったのか、例えば高校を卒業して大学からでも、あるいは社会人になってからでも同じような勉強や経験はできるのだろうと思うのですが、高校生活においてそれを経験できたことについて、何か思いがありましたらお聞かせいただきたいと思います。

○谷 氏 私から回答させていただきます。高校生活のうちに社会に出てみるですとか、いろいろな大人に会ってみるということを経験できたおかげで、社会へのハードルがいい意味で下がったというか、表現が難しいのですが、大学の同期と大学生活を送る中で、「みんなもっと社会に出てみればいいのに」と思う機会が結構あったなと思いました。

「大人はそんなに大人じゃないんだよ」と言いますか、大人も一緒に学び合えるということを私は高校時代に学んだので、大人と話したり、一緒に何かを作ってみたりすることのハードルを下げてくれたのは、高校生活の中で体験できたからではないかと思います。

○名達 氏 私も谷さんと同じような意見なのですが、社会のハードルといった意味では、やはり高校生は高校生として見られているので、何か起きたときには大人が責任を取ってくれるという安心感であったり、ちょっと無礼なことをしても許してもらえという安心感があったりする中での体験なので、もっとアグレッシブにいろいろなチャレンジができたなと思います。

大学生や社会人になると、どうしても個人の責任が大きいと感じてしまい、なかなか新しいチャレンジをすることや、新しい意見を言うことが怖くなってしまいうので、高校生のときに少し行き過ぎなぐらいいろいろな経験を積めたことによって、

大学生や社会人になったときにも、まだ新しい考えといいますか、挑戦するといったマインドをもち続けることができているかなと思います。以上です。

○秋元市長 他に何かありましたら、また後ほどお話を伺えたらと思います。お二人ともありがとうございます。

続いて、これからの市立高校について事務局から説明をお願いします。

○佐藤学校教育部長 これからの市立高校についてご説明を続けさせていただきます。これまでの市立高校の取組、社会の急激な変化、人口減少、国の高校改革に向けた動き、そして学校現場の実情や課題等を踏まえるとともに、昨今の生徒の多様なニーズや興味・関心に対応し、一人一人の可能性を広げて能力を最大限に伸ばしていくには、これからの市立高校の「新しいカタチ」はどのようにあるべきなのか、その未来像の検討を現在進めているところです。

その検討にあたっては、冒頭にご説明したとおり、検討会議と検討ワーキング会議を設置し、昨年末に開催した第1回目の検討会議以降、市立高校プレゼンテーション大会での生徒の姿の共有、両会議合同によるグループ協議なども行いながら、専門的・多角的な視点と、実務的な視点を組み合わせて協議を行っています。

これまでの協議を通じて、検討委員の皆様から、様々なご意見をいただきました。「小・中・高の学びの連続性の中での高校教育の役割」や「市が設置する高校の意味とは何か」という原点回帰の必要性や、生徒を支える大人同士がどう学び合っていくか、という市立高校のあり方や役割に関するご意見。テクノロジーへの探究心やもっと様々なことに挑戦、チャレンジして欲しい、といった生徒の姿に関する意見。また、他校の生徒と学び合える機会や、様々な大人と出会える機会の充実や、不登校生徒や多様な背景を持つ生徒を「誰一人取り残さない包摂の視点」といった学びの環境に関する意見。

そして、多くの共感と呼んだのが、「先生自身が楽しむことの重要性」という意見です。子どもたちの主体性を引き出すためには、伴走者である先生自身がワクワクして未来を語り、アップデートする姿を見せることが大切。だからこそ、改革を持続可能なものにするためには、「教員自身も学び続けられる場を整え、それを支えていくこと」が重要である、というご意見がありました。

また、これまで時代やニーズの変化に対応しながら、各学校の魅力化・特色化に取り組んできましたが、生徒たちからの多様なニーズや社会の変化から生まれる課題について、一つの学校ですべて対応することの難しさについても、しっかり向き合っていかななくてはなりません。人口減少によって学校規模が縮小し、教職員の働き方改革も待ったなしの状況において、各校がそれぞれAIやデータサイエンス、探究活動、グローバル教育、理系人材育成、そして外部との連携など、すべてを自前で展開することは簡単ではありません。そこで、これからの市立高校に求められるのは、各校が引き続き魅力化・特色化を図りつつも、それを1校の中で完結させるのではなく、市立高校全体で、お互いの強みや教育リソースを活用し合えるように

することではないかと認識しております。これからは、単一の学校から、学校群、市立高校コミュニティとしての有機的な連携へと転換し、単一の学校では成し得ない挑戦や多様なニーズに応えていく体制づくりが必要であると考えています。

そこで、現在検討している次期改革で目指すカタチのひとつが、「市立高校コミュニティ」、学校群としての連携です。これまでは個々の学校が独立して特色化を推進してきましたが、市立高校全体を一つのコミュニティとして捉え直します。

「自身の進路希望に応じ、他校の特色ある授業も受けられる」「各校でバラバラに開発されている探究のノウハウを市立高校モデルとし、さらに高め合う」そういった、学校の枠を越え、生徒や教職員がつながり、そして地域の大人たちも混ざり合う、この学校群としての連携ができることが、市立高校の最大の強みであり、目指すべき方向性なのではないかというものです。このコミュニティ化によって、生徒は自分の所属する高校という一つの扉から、市立高校全体の扉へとアクセスできるようになり、一人一人の無限の可能性や個性、多様な学習ニーズに、一体的に応えることが可能となるのではないかと考えています。

この市立高校コミュニティが目指すところは、札幌市の教育が目指す人間像「自立した札幌人」の育成です。未来に向かって新たな価値を創造し、主体的に学び続ける人。自他のよさや可能性を認め合い、しなやかに自分らしさを発揮する人。ふるさと札幌に誇りをもち、持続可能な社会の発展に向けて行動する人。この「自立した札幌人」を目指し、小・中・高の学びの連続の中で、総仕上げを行う高校は、どういう学びの場である必要があるのか、それを明確にし、高校に関わる全ての人々が共通理解して教育活動を進めていくためにも、この機に、市立高校コミュニティとしてのスクール・ミッションを新たに定義する必要があるのではないかと、という考えに至りました。

では、次期学習指導要領の方向性や国の高校改革の考え方、札幌市のまちづくりや教育の目標、これまでの市立高校の取組、高校の役割などを踏まえ、スクール・ミッションをどう定義するか。共通するのは、主体性や多様性、探究や挑戦、協働、自分らしさ、といった言葉。そして、これまでの検討会議とワーキンググループ会議の協議。それら全てを踏まえ、生徒、教職員、そして社会に向けて、「好奇心を力に探究する場」、「境界を越えて共に歩む場」、「自分を理解し深める場」の三つを市立高校全体のスクール・ミッションの候補としました。

この三つの言葉には、教育における本質的価値が込められており、一つ目の「好奇心を力に探究する場」では、それぞれの「なぜ」とか「知りたい」という好奇心を働かせて、試行錯誤や対話を繰り返しながら、一人一人が学びの主体となっていくこと。二つ目の「境界を越えて共に歩む場」では、単なる作業の協力ではなく、異なる価値観や背景を持つ多様な他者と出会い、お互いの違いを認め、歩み寄りながらつながりを深めていくこと。そして、三つ目の「自分を理解し深める場」では、他者との関わりの中で自らの強みや弱み、関心や価値観を理解し、自らの意思で人生の進路を選択する力を培うことを想定しております。なお、この三つの要素は段階ではなく、それぞれが相互に絡み合いながら成長していく場であることを表

しています。この市立高校コミュニティとしてのスクール・ミッションを、生徒や教員、大人たちの共通の言葉として位置付け、主体的な共感と意欲を引き出すような、次期改革の中核をなすメッセージとしていければと考えております。

次に、このような学びの場を、札幌のまち全体、社会総がかりで支え、活性化させるための協働の仕組みについてです。具体的には、現在検討中のこれからの市立高校が目指すカタチの二つめ「市立高校コンソーシアム」がそれにあたります。コンソーシアムは、持続可能な地域社会の担い手育成と、高校を核とした魅力ある地域づくりを目指すもので、行政、産業界、地域NPO、大学、社会教育機関などの多様なパートナーによるプラットフォームであり、地域を学びのフィールドとした学習活動や探究学習の推進を支えるとともに、教職員や関係する大人同士がつながり、学び合う場としての機能も有します。

また、このコンソーシアムは、これまで高校と地域をつなぐコーディネーターの方々が作り上げてきた外部資源とのネットワークを、一層「組織化・構造化」することにより、持続可能で充実した教育活動を安定的・継続的に提供し続ける仕組みへと高めていくことも意味しています。コンソーシアムによる効果は、生徒にとって、多様な社会人との日常的な触れ合いや、将来の視野を広げる機会が増えるだけではなく、「生徒を真ん中に、高校に関わる大人、地域住民、企業、そして教職員が、対等なパートナーとして札幌の未来を語り合い、学び合える場」が生まれ、市立高校が持続的な地方創生の核としての役割を果たすことにもあると考えています。

最後に、ここまでご説明してきました「これからの市立高校」について、現在検討しているポイントについて、改めてこちらのスライドでご説明します。

まずポイントの一つ目。単一の学校だけでは成し得ない挑戦や、多様化するニーズに応えていくため、これまで個別に特色化・魅力化を図ってきた市立高校を、全体で「ひとつのコミュニティ」として捉え直し、そのスクール・ミッションを新たに定義する。

次にポイントの二つ目。これからの社会を見据えながら、各校における教育の充実、魅力化・特色化を引き続き図っていきながら、市立高校コミュニティをさらに大きく発展させ、生徒たちの可能性をさらに引き出していく。

そして、ポイントの三つ目。各校と市立高校コミュニティの取組を支えるコンソーシアムの構築により、学校内外の連携を一層強化し、生徒を真ん中に、教員や地域、企業などの大人同士も学び合える場の創出を図ること、これら三つの取組を一体的に進めていくことを検討しております。

最後になりますが、本日の総合教育会議でのご議論も踏まえながら、この方向性を具現化する具体的な取組の検討も進め、市立高校の生徒たちが、心惹かれることに打ち込み、夢や希望をもって様々なことに挑戦し、多くの仲間と協力しながら社会へはばたく、そんな背中を力強く押せるような教育環境を目指して、引き続き次期改革に向けた検討を進めてまいりたいと思います。以上で事務局からの説明を終わります。

○秋元市長 ありがとうございます。これから意見交換に入りたいと思います。

まず、事務局からこれまでの市立高校改革の説明があり、その後、卒業生のお二人からご自身の体験や学校生活のお話を伺いました。それらを受け、今後の市立高校のさらなる発展のための方向性の説明として、いくつかのポイントを説明していただきました。

これらを踏まえ、今後の方針について期待をすることや、こういった点をもう少し付け加えてみたらどうかというご意見等をいただければと思います。それぞれからご発言をいただきたいと思います。佐藤委員からお願いします。

○佐藤委員 ご説明いただきありがとうございます。市立高校改革の検討会議、それからワーキンググループから出された意見が先ほど紹介されましたが、先生自身が楽しむことも重要という部分について私もそこに強く共感いたします。

先生方には、ぜひ生き生きと仕事をしていただきたいと思います。先生自身が生き生きすれば、それが子どもたちにも大きく影響するという見方ができ私はそれに大賛成です。出された意見の中に、先生方をどのように応援していくかという問いがありましたけれども、その応援をするのが私ども教育委員会だと思っております。

冒頭に、中教審の論点整理の説明をいただきましたけれども、「余白」を作ることがそこに入っておりまして、「余白」という言葉は少しネガティブな印象をもつのですが、そうではなく「余裕」と言い換えたらどうかなと思います。学校に余裕を生み出すことが今後の課題なのではないかと思っております。

後半の報告事項である働き方改革にも関係するところですが、先生方にアップデートしていただくことや、特に授業を上手に運営するためには、専門領域の知識をより拡大し続けていただくことがとても大事だと思っております。授業準備の時間を増やすということは、翌日の授業の予習をするということではございません。言ってみれば、自分自身の知識をより拡大してよりよい授業目標を設定し、高いレベルの知識を子どもたちにわかりやすく伝える準備をしていただくということです。ぜひ先生にアップデートの機会を提供していただければと思います。

それから、先ほどの卒業生のお二人のお話にもありましたように、探究活動については、ある程度余裕をもっていないとできないと思います。日々の授業に追われているだけでは、まわりの大人や外部の方々と関わる余裕は生まれないはずですので、生徒の皆さんだけではなく、先生方にもぜひ余白・余裕というものを提供していただけるような方向性で検討を進めていただければなと思っております。感想ですが以上でございます。

○秋元市長 ありがとうございます。中野委員お願いします。

○中野委員 市立高校において、社会との連携を深めて学校間のコミュニケーションを図ることは非常に大事なところですので、これからもぜひやっていただきたいのですが、今後の日本の社会のあり方として、理系人材が不足するということが言われております。今後、市立高校がこういった人材不足に対してどのように貢献していくのかというところが一つ重要かと思います。

連携というと、普通は生徒がいろいろなところと繋がって学ぶということですが、連携先にとっても何らかのメリットがないと続かないと思います。

各校のさらなる特色化というところに関して、先ほどの佐藤委員の話に戻りますが、先生方に日々ブラッシュアップしていただいて、高校が最先端の社会で求められているものを提供できるように研修などをしていただく必要があると思います。各校にPCを配布して情報化が進められているところですが、最先端のAIとなると習得するのは大変です。先生方が情報や理系科目に対応できるよう、多少時間と費用も負担しつつ、研修の機会を提供していただき、生徒からも魅力ある先生を確保することが必要だと思います。また、社会との連携については、「校内ではできないから校外に出ていく」という話ではなく、「学校だけでなく校外でも取り組む」といった、生徒と先生にとってWin-Winの関係を図っていただければと思います。以上でございます。

○秋元市長 ありがとうございます。田中委員お願いします。

○田中委員 私からは高大連携についてお話をさせていただきたいと思います。

息子が大学1年生なのですが、高校1、2年生のときに、高大連携授業の聴講型公開講座というものを高校から紹介していただき、半年間実際に大学に行って講義を受けさせていただきました。本人も、この機会は自分の進路を考えるきっかけとして非常にいい機会であったと言っておりました。

こういった学びの場を、学校だけでなく外にも作っていただけるということは非常にありがたいことだと思いますので、ぜひこのような高大連携を、これからも市立高校の活動の中に取り入れていただければと期待しております。以上です。

○秋元市長 ありがとうございます。朝倉委員お願いします。

○朝倉委員 朝倉です。先ほど、次期改革に向けての検討会議のお話があったかと思いますが、これからの高校について、学校をどうしていきたいか、どのような学校にしたいか、どのようなことを学んでみたいか、という子どもたちの思いがとても大切なのではないかと思っております。

次期改革の検討会議の中に、最近まで学生だった卒業生の方々がメンバーに入っているということは大変嬉しく思いますし、いいことだなと思っております。

先日、教育委員会の視察で他自治体に行かせていただいたのですが、様々な方が対等な立場で話し合う「ラウンドテーブル」というものを開催していると伺いまし

た。札幌でもぜひそういった取組や会議の場を取り入れていただけると、よりワクワクした会議になったり、よい内容のものができたりするのではないかなと思いましたので、ぜひ検討いただきたいと思います。以上です。

○秋元市長 ありがとうございます。道庁委員お願いします。

○道庁委員 道庁です。私からは、検討中のポイント3「学校と市立高校コミュニティの取組を支える仕組みづくり」について、意見を述べさせていただきたいと思っています。

地域住民の方々ですとか、他の学校、公的機関、各団体、それから地元の企業といったような方々が、創造的な対話を行って魅力ある学校づくりを目指すという連携協働はとても大切なことだと思いますし、札幌市においても活性化していくことが期待されることです。

そういった中、学校づくりとともに教育の実践という面で考えますと、本日の卒業生お二人のお話にもあったとおり、いろいろな大人、特に自分の興味のある分野において、大人の方々あるいは企業との間で一緒に学べる機会はとても大切です、そういうことが実践できれば素晴らしいのではないかと感じました。

他自治体の視察においても、いろいろな企業の方々や技能をもっている方々が様々な授業を行い、子どもたちは自分の興味に沿って授業に参加するという様子を見させていただいたこともあるのですが、そういった取組も一つあり得るのではないかなと思います。

こういった授業づくりは、高校側から見ると学校外の教育資源の活用ということになりますけれども、相手先から見ると、やっぱり地域社会も少子高齢化とか働き手不足といった課題を抱えておりますし、例えば企業にとっても地元の若い世代に自分の会社のことや仕事の内容が浸透していくということは、事業活動が続けていく上でも、あるいは社会貢献としても重要なものとして位置付けられますから、協働する側にとっても様々な利点があると思います。

そういった視点を含めながら、ぜひ社会全体での連携協働という、これからの高校教育施策、持続可能な仕組みづくりに取り組んでいただけたらなと思っております。以上です。

○秋元市長 ありがとうございます。山根教育長お願いします。

○山根教育長 名達さんと谷さんのお話を伺いまして、手前味噌ですけども、市立高校は大変素晴らしいなと思った次第であります。現場の先生たちのご努力に改めて敬意を表したいと思います。

まず、探究学習についてでありますけれども、先日公表された「全国学力・学習状況調査」においても、子どもの学習時間の減少が大きくクローズアップされました。民間の調査では、児童生徒の2割強が、「AIが進化すれば勉強する意味がなく

なるのではないか」という思いを抱いているという記事を見たところでございます。そういった意味で、子どもたちの間で学ぶ意義、目的を見失っている子どもの割合が増えてきている状況なのだと思います。

また、高校教育という点では、社会の変化に伴って大学進学の意味が変わってきたりですとか、従来どおり、単なる偏差値では測れないいろいろな人生の価値というものが求められてくるのだらうと思います。

「学ぶことの重要性を学ぶ」こと自体が人生に求められているという状況になってきている中で、今、市立高校の中でも実践されている実社会や実生活と自分の関わりから問いを生み出す探究学習、これの重要性はどんどん増してきてるのかなと、そしてこれからもさらに拡充していく必要があるのかなと感じているところがあります。

探究学習以外においても、開成中等の国際バカロレアですとか、大通高校の各取組、清田高校のグローバルや平岸高校のデザインアートなど、市立高校はこれまで各校の魅力を高めながら生徒が輝く教育環境のために先生方が非常にご努力をされてきたとともに、チャレンジを重ねてきたというこれまでの歴史があります。

本日、これらを振り返り、そういった伝統気風について今後のことを考えたときに、市立高校がもつ大変な強みにこれからもなっていくのかなと改めて思ったところがあります。来年開設される彩輝高校もぜひ素晴らしい学校になってくれたらいいなと思っております。

これからの時代、人口減少でどんどん学校規模等が縮小していく中で、どうやって多様な学びが可能な環境を確保していくかを考えなければならないところがありますが、これまでの市立高校の多様な取組は大きな財産になるものと思います。

また、今後さらなる少子化が進めば、場合によっては道立高校との連携も模索していかなければならない時代が来るのかなという感想も本日もったところがあります。以上です。

○秋元市長 ありがとうございます。加藤副市長お願いします。

○加藤副市長 先ほど卒業生のお二人の話にありましたけれども、高校生が学校から地域に出て行って、実際の地域の課題に触れたり、いろいろな人と協働しながら地域課題を解決する体験は非常に価値があると思います。生徒の学びにもなりますし、地域が開かれていくということで、札幌のまちづくりにとって非常に重要だと思います。

ですので、私どもといたしましても、その活動をしっかりと支えて、これからの札幌のまちを作っていくのは若者ですから、そういった人材を育成していくためにも、地域活動をしっかりと応援したいと思います。

願わくば、札幌に貢献したいと思ってくれる子どもたちがもう少し増えてくれるといいなと思います。ありがとうございます。

○秋元市長 ありがとうございます。それでは私からもお話をさせていただければと思います。

本日は、卒業生のお二人にご自身の体験をお話いただきありがとうございます。お二人の話を聞いて、これまでの市立高校のいろいろな特色や、自立性や探究といったことを、言葉としてはわかっていましたけれど、具体的にそこでどのような教育活動がなされていて、子どもたちはどのように育っているのだろうかということが、自分なりにストンと落ちていなかった部分がありました。「言うのは簡単だけど本当のところはどうなのだろう」と思っていました。

というのも、自分が高校生のときとは全く違う。私の時代だと、1年生から2年生の中盤くらいまでは部活動で一定程度時間を使い、2年生の後半くらいから大学受験の勉強一本にならざるを得なかった。そういう意味では、大学に行って初めて社会とつながることができた時代だったので、お二人のお話のように、高校生のときからいろいろな社会との実践活動ができるという点はある意味頼もしく、こういった形で高校教育改革を進められてきたということに対し、教育委員会の皆さん、それから現場の先生方の取組に改めて敬意を表したいなと思っております。

お二人には、市立学校での生活を過ごしていた方々を代表してお話いただきましたけれど、多くの人たちがそのように思っただけにいるのだとすれば、それは非常にいいことで、素晴らしいことかなと思っております。

今後の方向性としては、その一つがコミュニティ化ということでした。それぞれの資源には限りがありますから、これらを共有していろいろなところで参加できるという点は非常に有意義だと思いますし、また、外部の人たちとの接点について皆さんがお話されていて、これが重要だと思います。そこが仕組みとしてでき上がってくるとよりいいのかなと思います。

また、先ほど、道庁委員を含めてお話があったと思いますが、企業の人にも多分にメリットがあると思うので、本日のお二人のお話をぜひ企業の人たちにも聞いてもらい、自分たちの会社のことを知ってもらう機会にしたいということもあるでしょうし、また、講師としてぜひそういった取組に参画したい、あるいはその実践の場にうちの企業を使ってほしいというようなことも出てくるのではないかと思います。

ですので、高校のPRもそうですけれども、お互いが足りないものを補完し合うような関係を作ってもらえる方針・計画にぜひしていただきたいと思います。本日お話をいただいた卒業生のお二人には、改めてどうもありがとうございました。

それでは、議題に関しては以上とし、報告事項に移ります。事務局からお願いします。

○手塚総務部長 総務部長の手塚です。私から「札幌市立学校における働き方改革プラン」の策定の報告をさせていただきます。策定状況を総合教育会議において報告することが法律で決められておりますので、ここで報告させていただきます。

スライド2 ページ目です。本日は策定までの経過、本市の状況、策定した働き方改革プランの概要の3点についてご説明させていただきます。

スライド3 ページ目です。昨年6月に、教員の勤務条件や給与などを定めた法律、いわゆる給特法が改正され、教員の処遇改善、働き方改革の一層の推進に取り組んでいくこととなりました。本市では本年1月に総合教育会議の場で本市の働き方改革の取組状況及びプラン策定の方向性につきましてご報告させていただきました。

その場において、市長や教育委員の皆様より、策定のプロセスを重視するようご助言をいただいたことから、保護者アンケートを実施し、本年3月に、札幌市における業務量管理・健康確保措置実施計画として働き方改革プランを策定しました。この計画の策定については、総合教育会議で報告することが給特法で義務付けられていることから、本日、お時間をいただいております。

スライド4 ページ目です。こちらは本市における時間外在校等時間の推移です。右側が全校種の令和7年度の実績値で、約16時間程度減少しています。

スライド5 ページ目です。本プランの策定にあたり、保護者向けのアンケートを実施しました。働き方改革の取組状況の認知度と合わせて、この推進に関する意見を伺っています。肯定的な意見だけでなく、不安に思うご意見もありました。実際の生の声を伺った上でプランを策定できたことは非常に有意義であったと考えています。

スライド6 ページ目です。具体的な計画の内容です。計画期間は、令和8年度から令和11年度末までです。本計画は、教員の負担を軽減し、児童生徒に向き合う時間を確保することで「質の高い教育活動を実現すること」を目的としています。目標として、国の指針を上回る「月平均の時間外在校等時間を25時間以内」「45時間超えの職員割合を0%」と設定しました。また、ワークライフバランスの目標として、年休取得やストレスチェックの改善に加え、男性育休の4週間以上の取得率を85%とすることを追加しております。

スライド7 ページ目です。計画達成に向けた取組です。教育委員会の取組として、「勤務時間を意識した働き方」の推進、ICT活用等の「業務の見直し・環境整備」、外部人材との連携などの「チーム学校体制の整備」を進めます。学校においては、対話を通じた信頼関係の構築を前提に、教育活動や協働体制の工夫を求めてまいります。また、健康確保措置として、医師による面接指導や休暇取得促進など、心身ともに健康で働ける環境づくりに努めます。

スライド8 ページ目です。最後に進捗のフォローアップについてです。本計画の進捗状況は、今後も総合教育会議において定期的にご報告いたします。また、働き方改革を推進するにあたって、保護者や地域の皆様理解を求めていくプロセスを確保していくために、保護者向けのリーフレットを作成し配信いたしました。今後も機会をとらえて広く理解を求めてまいります。以上で、働き方改革プランの策定のご報告とさせていただきます。

○秋元市長 それではお時間となりましたので、事務局にマイクをお返しします。

○手塚総務部長 以上をもちまして「令和８年度札幌市総合教育会議」を閉会いたします。このたびはありがとうございました。